

## 高校英語における読みの技能の育成に関する一考察 ～コミュニケーション英語 II の検定教科書の分析を通して～

Some Thoughts on Helping High School Students to Develop Reading Skills:

An Analysis of Authorized Textbooks for English Communication II

福島美枝子

FUKUSHIMA Mieko

本稿は、高校の英語教育において読みの技能を育成する方法について考察するために、「コミュニケーション英語 II」のために編纂された検定教科書を取り上げ、分析を行なう。どのように読みの技能の育成が図られているのかを観察し、教科書を使用して読みの技能の育成を目指す場合にどのような配慮が必要であるのかを考察する。この分析の基礎となる実践上の枠組みとして、読む前から読んだ後までの3段階の過程 (Pre-Reading, While Reading, Post-Reading Activities) を設定し、読みの方略 (Reading Strategies) を育成する意図を持つものと仮定する。分析結果として次のような特徴と配慮すべき点が示唆された。(1) Pre-Reading と Post-Reading の活動が明確に設定されている。既得の知識の活性化など、それらの活動の目的の明確化が必要である。表題や写真を見て自由に内容を予測する活動も設けたい。(2)教科書を通して実際にどのような While Reading の過程が実現しているのかは不明である。スキミングやスキヤニングを促す問題が提供されている教科書がある。それが自力でできるかどうかの問題だ。(3)いくつかの重要な読みの方略が紹介されているものの、概してそれらを直接的に練習する部分は少ない。(4)全体を通して、教科書で設定された活動によって生徒の読みの過程が方向付けされている。もっと生徒自身の心の動きを生かす方法にも取り組むべきではないだろうか。(5)アカデミックなリーディングから趣味の読書に至るまで、生徒が自主的に一連続の文章を読む活動も促していきたい。

キーワード：高校、コミュニケーション英語、読みの技能・方略、

3段階のリーディング活動、読み手中心の教育実践

## 1. はじめに

認知心理学の発展とともに着目されるようになった「方略」(またはストラテジー: strategies) という概念は、児童生徒の主体性を促す現在の国の方針にとっても重要なものである。この概念が外国語教育の分野に導入されるようになったのはいつ頃だろうか。筆者が知る研究の中で最も早く「学習方略」(learning strategies)の概念を用いていたのは、Naiman 他 *The Good Language Learner* という研究(初版 1978 年)である。本稿で取り上げるリーディングに関わる「読みの方略」(reading strategies)に関しては、金谷憲氏(1995)が 1980 年代後半から研究が増えてきたと指摘している。その時期の包括的な論考に天満美智子氏の「英文読解のストラテジー」(1990 再版)がある。この著作は、読解とは何かについての論考から始まり、読解に関する諸理論や用語の解説を行ない、さらに英文読解に関する授業の実態や問題点(困難要因など)を描き出し、文および文章のレベルの具体的なストラテジーを詳述してそれぞれの技能を伸ばす練習問題を多く提示し、最後に読解力と教材の評価について論じている。

実践面では、日本の英語教育に携わる人々の間で、実際に読む過程(While Reading)だけではなく読む前(Pre-Reading)と読んだ後(Post-Reading)の活動も視野に入れて多様な読みの方略を習得すること、ボトムアップ処理(bottom-up processing)とトップダウン処理(top-down processing)の必要性、スキミング(走り読み: skimming)とスキニング(探し読み: scanning)の活用、スキーマ(テキストの構造や内容に関する既習の知識: schema)の重要性といった基本的な事柄はかなり早い段階で情報として入って来ていたように思われる。また、筆者も含めて実際に大学の授業で読みの方略の習得を促そうとしてきた人達は多くいるのではないだろうか。仲本直美(2019)、大島幸(2020)、森明智(2020)などに示されているように、大学生や大学院生の読みの方略に関する研究は最近も絶えることなく行われている。

読みに関する高校の授業の実態として、天満美智子氏(1990)は文法訳読式の指導が基調であることを示唆し、生徒達はひとつひとつの英文を訳すことはできてもそれらのつながりや全体が掴めない傾向があることを指摘している。さらに、全国規模のアンケートから得られた生徒や学生の批判的な声を多く例示し、「生徒たちの多くが、英語の授業のあるべき姿を的確に透視していることに、教師はむしろ驚くにちがいない。」と述べている。それから約 20 年の歳月を経た段階で発表された、川辺香織氏の「高校生のクリティカル・リーディングの方略育成に関する研究」(2010)では、県立高校の 3 年生 70 人が 10 分程度で読める英文を読んだ際に留意した点を調査したアンケートの結果が提示されている。19 項目の中から自身が行なったと思うものを選ぶアンケートである。もっとも多い 52 人の生徒が選んだのが「スラッシュを入れながら読んだ」という項目だった。各文の中の意

味のまとまりを意識しながら読み進める手法である。スラッシュ読みの次にきたのが、「分からない単語に印をつけながら読んだ」(18人)、「本文に出ている数字に気をつけた」(17人)、「代名詞が指す内容を考えながら読んだ」(16名)、「分からない単語等を推測しながら読んだ」(15人)などだった。一方、「パラグラフごとの大まかな内容をとらえようとした」、「全体の流れをつかもうとした」、「本文のタイトルを考えながら読んだ」、「要点はどこかを考えながら読んだ」などはごく少数の生徒しか選んでいなかった。

こうした結果を受けて川辺氏は、「これまで英文を読む時に、日本語訳をすることと、英文に対する設問にいかにか正しく答えるかということを目標にしてきたためであると考えられる。」と述べている。読みの過程がボトムアップの傾向を持ち、トップダウンで始めることが稀有なことと関連しているように思われる。川辺香織氏は、従来日本の国語のテストで用いられてきた問題の特徴を PISA 型の読解力テストと比較している。今後のために生徒同士の協働的な読みの過程と振り返りの重要性を指摘し、生徒同士の発話の記録によって生徒が使っている読みの方略を分析していきたいと述べている。

川辺氏のアンケート結果がどれだけ一般化して解釈できるのかは分からないが、10年ほど経った現在、最新の検定教科書ではどのように読みの技能の育成が意図されているのかを見てみたい。そこで、本稿では 2017 年 2 月 28 日に検定済となり 2019 年または 2020 年に発行されたコミュニケーション英語 II の教科書を分析し、高校生の読みの技能の育成がどのように意図されているのか、そして教室での実践の次元ではどのような配慮が必要であるのかについて考察してみたい。

## 2. 検定教科書の特徴

本稿で取り上げる教科書は、高等学校の「コミュニケーション英語 II」のために編纂された Power On English Communication II (東京書籍 2019 年 2 月発行)、ELEMENT English Communication II (啓林館 2019 年 12 月発行)、BIG DIPPER English Communication II (数研出版 2020 年 1 月発行)、Grove English Communication II (文英堂 2020 年 2 月発行) の 4 冊である。(以下、English Communication II を省いた名称を使用)

### (1) 全体の構成と各課のテーマ

4 冊共にリーディング教材を中心とする 10 課 (10 lessons) から成り立っている。次頁の表 1 は、各課のテーマとそれ以外にリーディングが直接関わるセクションを抜き出したものである。各課のテーマを見てみると、いくつか傾向が類似しているものが見られる。日本に関する事柄、特定の国や都市、食文化、有名な人物や活躍している若者、環境を巡

る諸問題、科学的な事象、宇宙に関する事柄などである。各課にはそこで学ぶ文法や文構造が指定されており、殆どは目次にそれらの記載がある。

Power On、ELEMENT、Grove の3冊は、巻頭部で重要な読みの技能を明示している箇所があり、Grove は巻末でも読みの技能を取り上げている。また、これら3冊は、それぞれ2か所または3カ所に比較的長いストーリー（分割されない一連続の文章）のリーディングに集中できるセクションを設けている。BIG DIPPER も、巻末に1回、心温まるストーリーをひとつ提供している。加えて、4課が終わったところで寸劇用の台詞（一連続の対話）を掲載している。

表1 各課の表題および読みの技能の秘訣や助言

Power On (2019)	ELEMENT (2019)	BIG DIPPER (2020)	Grove (2020)
<b>Tips for Reading 1~3</b>	<b>Reading Skill 1~5</b>	1. Washoku Around the World	<b>Reading Skills</b> [基本的なスキル]
1. Take a Shot or Not	1. Beyond Words	2. Chirori, the First Therapy	1. Mt. Fuji: The Pride of Japan
2. Ethical Fashion	2. Stay Hungry, Stay Foolish	Dog in Japan	2. Yes, I Do Climb
3. Landfill Harmonic	3. A Teenager To Change the World	3. How Good Is Your Memory	3. A Penguin Called Happy Feet
4. Icons of Scotland	4. Life in a Jar	4. Space Elevator	4. Warka Water
<b>Reading 1</b> Going Home	<b>Further Reading 1</b> Try Brainteasers!1	<b>Acting Out</b> Crash	<b>FOR READING 1</b> Salty Coffee
		5. Diversity Brings New Products	
5. Japan's Secret Health Food	5. Space Debris	6. Ueno Takahiro:	5. A Hidden History of Tomatoes
6. Vegetable Factories	6. Caddy for Life	The Dancer in Me	6. Iceland
7. The Power of Color	7. iPS Cells	7. The France Okaeshi Project	7. Which Jam Would You Like?
8. Miu and Miwa, Friendly but Tough Competitions	8. Selective Breeding	8. What Is the True Meaning of <i>Mottainai</i>	8. Paper Buildings
9. From Owning to Sharing	9. The Vancouver Arashi	9. Fair Play in Sports: What Is "Fair"?	9. Lunch Delivery in Mumbai
10. Solar Cooking	10. Euglena	10. Floating Education	10. Saving Wildlife from Global Warming
<b>Reading 2</b> Fly, Dakota, Fly!	<b>Further Reading 2</b> Momo	<b>READING</b> Badger's Parting Gifts	<b>FOR READING 2</b> Rickshaw Girl by Mitali Perkins
	<b>Pleasure Reading</b> A Retrieved Reformation		<b>Reading Skills 1~4</b>
	<b>Speed Reading 1~10</b>		

リーディング用に各課やストーリーの読みのセクションに掲載された文章に関しては、ELEMENT だけが長さの指標である語数を目次で明示している。各課では 536 語から 825 語まで、ストーリーの読みでは 852 語と 1,279 語の文章が扱われている。各課でも文章を分割せず提示しているのも ELEMENT だけである。

リーディング以外の事項に関しては多様である。Power On は 2 課終わるごとに英語の音声の特質について解説をする「Sounds Interesting!」という部分を設けている。さらに、「Let's Make a Presentation!」、「Essay Writing」、「英語活用力 Up コーナー」も設けて総合力の育成を図っている。ELEMENT は「Communication Tip」(会話やコミュニケーション上の助言)、「Communication Strategy」(スピーチやディベートの方法の学習、先行する課の内容と関連している)、「Communication Builder」(4 技能の到達度の測定)、「Listening Skill」(数字の聞き取りなど)をそれぞれ 2～3 カ所に挿入している。加えて、巻頭部でヨーロッパのコミュニケーション能力の評価基準である CEFR を提示し、2 年生用の ELEMENT は B1 レベルを中心とすることを指摘している点に注目が必要である。BIG DIPPER は 2 課終わるごとに「Function」という部分を設け、予定・意図、説明、賛成・反対など、発話のコミュニケーション上の機能に関わる英語表現の学習を促している。そして、第 4 課が終わったところで寸劇用の台本を掲載しているのは、他の教科書にない特徴である。演じない場合は「演じているつもりで声を出して読んでみよう」と書いてあるので、音読用の会話体の文章と考えることもできる。Grove は各課の最後に「Communication Corner」(Let's Read and Write または Let's Listen and Speak)という部分が必ず出てくるが、これは読んだ文章の内容と関わる発展的活動なので、次の各課の構成の項で吟味してみたい。

## (2) 各課の構成

### Power On (2019)

1 頁目にはテーマの下に大きな写真が掲載されて表紙のようになっている。その頁の下部に Goals of the Lesson が与えられている。2 頁目から登場する各課の文章は 3 つか 4 つの部分に分割され、それぞれのパートに「Grammar」(目標の文法事項の説明) → 「Task 1~2」(読解の確認) → 「Plus One」(内容と関連して生徒自身の経験や考えを尋ねるもの) → 「Practice」(目標の文法事項の練習問題) が含まれる。この後、課のまとめとして「Summary」(空欄補充によって日本語と英語のまとめを完成させる課題)と「Exercises」(文法や表現の練習)があり、最後に「Challenge!」で発展的内容を聞き取り、その内容に自身の意見や感想も加えて文章にし、発表する。そのために使える語彙や表現が「Hints!」として与えられている。

### **ELEMENT (2019)**

各課の最初の見開き 2 頁に、写真とその右側に「Leading In」、 「Sharing Ideas」 (2 つの質問)、「Goals for the Lesson」 (Can-Do リスト) の 3 項目が示されている。次に「Graphic Introduction and Retelling」と題された 2 頁があり、短い英語の解説の付いた複数の写真や図が掲載されている。そして次の見開き 2 頁にリーディング教材の全体が出てくる。部分の切れ目が <Part 1>、<Part 2>などで表示されているが、既に述べたように、この教科書だけ本文を分割せず提示している。本文の左頁の左側と右頁の右側に New Words が発音記号付きで列挙されている。リーディング教材のあとは 4 頁にわたって、「Comprehension」、「Vocabulary」、「Grammar & Structure」が続く。「Comprehension」は 4 部分からなり、「main ideas」と「details」を確認した後、「Graphic Introduction」の箇所にあった写真を見ながら「Retelling the story」が求められる。各課の最後は「Communication Activity」(会話を聞いたり、対話を完成したり、自分の意見を書いたりする活動)を行なう。

### **BIG DIPPER (2020)**

最初の頁にテーマ、写真、「Your Goal!」(この課の目標)があり、2 頁目に「Warm Up」の活動が設定してある。4 枚の絵や写真と聞いた内容を一致させる問題と、そのうちの 1 枚についてペアになって穴埋め方式で意見交換の対話を作る活動である。本文は 3 つないし 4 つの部分に分割され、それぞれの部分が提示されている頁の左側には新出語とその発音記号が示され、同じ頁の下部には、読みを容易にするためのヒントがいくつか与えられている。指示語の意味を訊いたり、イディオムを指摘したり、専門的な用語の訳を与えたりなどである。本文の後には、「Hints for Understanding」(文法事項の説明)、「Read It Through」(正誤問題、整序問題などから 2 問)、「Let's talk」(本文に関連した質問が与えられていて、これに応じて対話を成すペアワーク)が続く。課の最後にはまとめとして、「Vocabulary Building」(英語の意味を見て本文に出てきた単語を書く問題)、「Summary」(穴埋めで本文の内容の要点をまとめるもの)、「Review」と「Drill」(いずれも学習目標の文法項目に関するもの)が据えられている。

### **Grove (2020)**

最初の頁に写真が掲載され、各写真に英語の質問がひとつずつ付いている。BIG DIPPER と同様に、本文は 3 つないし 4 つの部分に分割され、それぞれの部分を提示したページの下部に、指示語、イディオム、表現などが示されている。本文の後には「Master the Pattern」(文法事項の説明、例示、練習問題)と「Master the Contents」(読解確認のための英問英答 2 問とその他の設問)が続く。課の終わりには、「Put It All Together」(穴埋めで本文の要約を完成させる問題と各部分から印象に残った語句を挙げてそれにつ

いての感想を書いて発表する活動)、「Sound Play」(英語の個別の子音の発音の仕方の指導と音の連結またはカタカナ語との発音の違いに着目させる活動)、「Make It Own」(文法事項に関する練習問題3種)があり、最後に「Communication Corner」が設けられていて、本文に関連する内容で聞き話す様態と読み書く様態に交互に焦点が当たっており、「PRESENTATION」、「REPORT」、「DEBATE」などの目標が指定されている。

### (3) 読みの技能の育成方法

4冊の教科書においてどのように読みの技能の育成が意図されているかを見るには、まず、3冊の教科書では巻頭部分において読みの技能が明示的に解説されている点に注目する必要がある。興味深いことに、次の表2に示されているように、扱われている技能や事項には共通部分と多様性がある。3つに共通しているのは、ディスコースマーカーに注目

表2 読みの技能の秘訣・助言

Power On (2019)	ELEMENT (2019)	Grove (2020)
<b>Tips for Reading ①</b> ◆フレーズリーディング *スラッシュを入れる場所の例 ◆句読法 *各記号の呼び方と使い方の例	<b>Reading Skill 1</b> 文章の構成 序論・本論・結論 トピックセンテンス	<b>Reading Skills [基本的なスキル]</b> 1. スラッシュリーディング 2. 主題文(トピック・センテンス)と支持文(サポート・センテンス) 3. スキミング(要点読み) 4. スキャニング(探し読み) 5. その他のスキル ・読む前の予測(タイトル、写真、イラストなどの情報に着目) ・指示語の理解 ・同意語句の理解 ・未知語の推測 (巻末部) <b>Reading Skills 1</b> 列挙・例示 <b>Reading Skills 2</b> 比較・対照 <b>Reading Skills 3</b> 原因・結果 <b>Reading Skills 4</b> 事実・意見
	<b>Reading Skill 2</b> パラグラフと展開① 例示と追加のディスコースマーカー	
<b>Tips for Reading ②</b> ◆ディスコースマーカー 1. 順序を示す例 2. 追加や比較を示す例 3. 具体例や詳細を示す例 4. 結果、条件、譲歩と反論を示す例 *ふろしきの包み方	<b>Reading Skill 3</b> パラグラフと展開② 列挙のディスコースマーカー	
	<b>Reading Skill 4</b> パラグラフと展開③ 時間順序のディスコースマーカー	
	<b>Reading Skill 5</b> パラグラフと展開④ 対比・対照のディスコースマーカー	
<b>Tips for Reading ③</b> ◆未知語の意味の推測 *手がかりとなる接頭辞と接尾辞		
<b>英語活用力 Up コーナー(巻末部)</b> 英語で注文(メニューのスキャニング) 英語のパフレット(スキミング)		

して段落または全体の展開をつかむ面を取り上げている点である。ELEMENT はさらに序論・本論・結論という全体の構成にも言及している。段落の構成に関しては、ELEMENT と Grove がトピックセンテンスとサポートセンテンスの関わりを説明している。

ELEMENT では、巻頭の Reading Skill の各部分で比較的長い文章を用いて文章の構成やディスコースマーカールが紹介され、それらに着目して読む練習をするようになっている。Power On と Grove では、巻末部においてそれぞれ、スキミングとスキミングの練習、または段落内の主題文と支持文の意味的關係を学びそれを捉える練習をするようになっている。しかしながら、概してそうした練習の箇所は少なく、扱われている読みの技能・方略と各課の本文との関連は明確ではない。

Power On と Grove に共通するところでは、前述の川辺香織氏のアンケート調査(2010)で数多くの高校生が使用していると回答したスラッシュを入れながら読む技法だけではなく、スキミングとスキミングが取り上げられている。ELEMENT では各課の読後問題がそれを狙っている。未知語の意味の推測は、ずいぶん昔から重要な技法として語り継がれてきたように思われるが、Power On ではこの点において一步踏み込み、手がかりとなる接頭辞と接尾辞の意味をリストの形で提示している。また、4冊の中でもっとも多様な読みの方略のリストを提示しているのは Grove であり、読む前の予測活動にも言及している。

以上、明示的に読みの技法や方略が説明されている部分に関してまとめてみたが、実際に各課に入った時にどう読ませようとしているかも見なければならない。先に見た各課の構成を、読む前の活動、読む活動、読んだ後の活動に分けて観察してみたい。

### 【読む前の活動】(Pre-reading activities)

①4冊共に、課のテーマを示しているページで写真が多用されている。この写真はどのように使うように求められているのだろうか。Power On では最初の頁の写真を使って行なう具体的な行動は指定されていない。写真だけで想像を膨らます可能性が他より大きいと考えて良いかもしれない。ELEMENT では写真の右側に指定されている「Leading In」で本文の内容に関係する音声を聞き、次の「Sharing Ideas」の箇所に2つの英語の質問があり、これが読む前の精神の活性化とでも言えるものに役立つと考えられる。それは内容を直接推測させるものではないが、次の「Graphic Introduction」に進むと更なる写真とともに内容に直結する情報が出てきて読みの準備となる。BIG DIPPER では、テーマが書かれた頁の写真とは別に「Warm Up」の箇所に4枚の写真や絵が用いられていて、この写真または絵を使ってペアで会話をするようになっている。その課の本文の内容にまで踏み込んではいないが、扱われている話題に英語で若干触れるような活動である。Grove ではテーマの頁にある3枚の写真に関連してそれぞれ英語で質問



されている。

- ②各課の文章の表題を見て内容を予想する活動は設定されていない。代わりに、ELEMENT、BIG DIPPER、Grove では、表題の下に副題とか 2 行程度の概略を与えることでこれから遭遇する内容のイメージが膨らむよう図られている。ELEMENT では表題に付けられている副題を味わうことで、内容の骨子に当たるようなことが推測できそう。例えば、第 6 課で Caddy for Life という表題の下に The last moment in the spotlight とある。一生をゴルフのキャディとして生きた人のことを扱っている課だという予想に加えて、何らかのことが原因でその人生に終わりを迎えなければならず、皆が見守る中でキャディとして最後の瞬間を迎えたのだと推測できる。

BIG DIPPER と Glove では、表題の後に日本語で簡単な問いかけやコメントが書いてあり、これから出て来る内容の骨子を予想させる。例えば、第 3 課で How Good Is Your Memory? という表題の下に「もっとたくさんの方が覚えられたらなあ」と思ったことはありませんか。記憶力アップには秘訣があるのです。」と日本語で書いてある。このことにより、自身の記憶力に内省が求められているだけではなく、記憶力を改善する方法にまで話が進んで行くのだと推測できる。Grove の第 4 課では Warka Water という表題の下に「清潔な飲料水を手に入れることが困難な国や地域がたくさんあります。水を得るために、電力に頼らず自然を利用した画期的な方法が開発されました。」と書かれている。それはアフリカのどこかかなあなどと想像しながら、その画期的な方法とはどのようなものなのかに関心を持って読み進めることができる。表題にある Warka の意味（巨大なワーカの木）が生徒自身にすでに分かっている場合は、その木と飲料水の入手方法との関係に疑問を持って進んで行く一方で、Warka の意味が分からない生徒は Warka って何だろう、それがどう関係するのだろうと思って読みを進めていくことになるだろう。

- ③前述したように、Power On、ELEMENT、BIG DIPPER には各課の最初の頁にその課の目標が明示されている。Power On と ELEMENT は使用言語に違いがあり、前者は日本語で後者は英語の I can ... の形で目標が書かれているが、本文の内容を読み取る目標と、それに関連して聞き、話し、書く目標とで構成されている。一方、BIG DIPPER では Vocabulary、Grammar、Function、Contents の 4 項目について目標が掲げられていて、4 冊の中ではもっとも英語（語彙、文法、機能）の勉強の色合いが強く、読みに直接関係する目標は挙げられていない。代わりに Contents の項で「...について調べて発表しよう。」という目標が掲げられている。

### 【読む活動】(While-reading)

生徒が各課の本文をどのように読んでいるのかは、言うまでもなく判断しにくい。まず単語の意味を辞書で調べ、次に各文の構造を分析しながら意味を確認し、この作業を重ねて全部に目を通すといった、いわゆる伝統的なボトムアップの接し方をしているのか、スラッシュリーディングが促されているのか、黙読が促されているのか音読もしているのか、まず音声教材として本文に触れてまず要点を推測するよう促されているのか、日本語に訳すようなことをしているのか、目標の文法項目はいつの時点で扱うのかなど、実際の教室に行かなければ分からない。

### 【読んだ後の活動】(Post-reading activities)

- ①いずれも、教科書の構成上、読解ができたかどうかを確認するような問題や自身の経験を尋ねる問題が本文のあとに置かれている。読解の確認には、英問英答、正誤問題、空欄補充などが使われているが、要点をつかむとか、詳細部分に着目するといった読みの技法とか方略が重視されているのが分かる。ELEMENT では、そうした問題に「Reading for main ideas」とか「Reading for details」という名称を使うことで目的を明示している。教室において読解確認問題を先に読んでから本文を読むように促されていたら、読んだ後ではなく、読みの過程でスキミングやスキヤニングを使うよう励まされていると考えることができるだろう。
- ②語彙や文法や表現の練習問題も重要な位置を占めている。これに焦点が行き過ぎれば、常に分析的でボトムアップだけに頼る読み方が促されてしまう可能性があるかもしれない。
- ③読んだ後の活動には多様性があり、サマリーの作成、リテリング、関連情報に関する意見の発表、ディスカッションやディベートなどが設定されている。また、これらにおいてペアやグループでの活動や教室での発表といった協働の形態も設定されている。それぞれの生徒が英語を使ってかなり話したり書いたりできるようになっていけば、読後の活動によって生徒間で交換される内容や形式の自由度を増すことができるのではないかと思われるが、使うべき表現が与えられている傾向があり、概して、全体を生徒が自分で生み出す方向にまでは至っていない。もっとも、教科書をそのまま使う必要はないので、生徒の実情に合わせて、教科書に指定してある言語形式より自由な表現活動を促している教室もあるだろう。
- ④前述したように、4冊共に、各課の勉強とは別に数カ所に読み物を挿入しており、ストーリーなどを一気に読むような機会が与えられている。副読本を使用してこうした機会をもっと多く設けている学校もあるだろう。

### 3. 読みの技能の育成のために留意すべきこと

以上の分析結果をもとに、教科書の特徴をまとめ、配慮すべき点を考察してみたい。

本稿で分析した教科書は、いずれも、読む前の活動、読む活動、読んだ後の活動という3段階方式が守られ、明確な構成で生徒の活動を方向付けている。英語で言えば、**a directed approach to reading instruction** と言えるだろう。各課で取り上げられている本文には生徒にとって新情報と思われるものが多く出てくるのだが、どんな点について書かれているのかを読む前の段階で予想することができるような作りになっている。実際に本文を読んでいる時にどのような活動をしているのかについては、それぞれの教室を観察してみないと分からないが、読み取れたかどうかを確認したり、読み取った内容をサマリーという形でしっかりと英語で身につけたりする手段も提供されている。加えて、口頭や書き言葉での発展的活動（発表、ディベート、報告等）も用意されている。一言で言えば、生徒達を導く方法がすでに決められており、学習活動がそういう意味でやりやすくなるよう図られていると考えられる。

ここで、課題と思われる点を3つ取り上げてみたい。まず、本稿で調べた教科書は、いずれも読む前や読んだ後の活動を十分に設定しているとみることができそうだ。前者を取り上げてみると、各課のテーマだけではなく、副題、写真、短いコメント、課のゴールを示すことで、読む内容へと誘うことに成功しているように思われる。しかしながら、ここで留意すべきなのは、読む前の活動のねらいは何なのかを学習者自身で意識できるようにすることである。天満美智子氏（1990）が指摘しているように、「テキストの題字、作者名、あるいは挿画、写真など」の「手がかりから、あなたが事前にもっているスキーマを活性化させて、テキストの内的な概念表象を作り上げるのである」（97頁）。そういう意味において、テーマだけを見て思い浮かぶ事柄を話し合わせることも有用であるし、そんな余裕のある取り組みにしたいものである。写真や図が出てくるのなら、自由にそれらと遊ぶ時間も設けたいものである。英語で読んでいく作業が控えているので、関連する知識が日本語で生徒の心の中に既にあるのなら、それを英語に直しておくことも必要である。

例えば、ELEMENTの中にiPSと題した課がある。このテーマについてそれぞれの教室にいる高校生はどんな知識を持っているのだろうか。教師は教えている生徒達の知識の量や質について或る程度予想し、そこから、読むことになっている文章からどのような新情報が得られるのかを推測する必要がある。既存の知識と新たに遭遇する情報の間の差は多様であり、教える学習者のグループによっても異なるはずである。ここではその差が大きい例として、山中教授がノーベル賞を受賞したことやiPS細胞が人工の細胞であるということ以上に知識のある生徒がいない状況だと仮定してみよう。まず、彼らの知識を確認するために教師は生徒達と口頭でやり取りをしたり、iPS細胞について知っていることを

平易な英語で言ったり書いたりする課題を与えてみてはどうだろうか。それがいくら単純な内容でも、概ね日本語で入っている内容が英語に変化していくので有益である。一方、ELEMENT 中の iPS に関する課で生徒達が遭遇する文章は、内容も英語ももっと高度であり、本文の前に掲載された Graphic Information の箇所が大変有用になる。本文を読んだ後でどれだけその内容が英語で内化できるかという、本文のすべてを暗記する方法を用いる生徒がいるのでなければ、読後に教科書の問題において完成させる各段落の要点を使って Retelling する活動が役立つだろう。

第2の留意点は、生徒それぞれの自由な心の動きをどのように生かし、彼らが持っている英語との調整をどうしていくのかという問題である。換言すれば、A learner-centered approach to reading をいかに組み入れるかである。写真を見た時でも、本文を読んでいる時でも良い。読み手にはそれぞれの心にふと浮かぶ疑問や思いがあるはずである。それは、言語的に文が難しいという感覚である場合もあれば、意味が分かった上で疑問が浮かぶという場合もある。教科書や教師によってあまりにもきちんとした方向付けが行われているために、貴重な生徒自身の心の動きが見逃されてしまう危険性があるかもしれない。筆者はそんなことを教室の後ろで授業参観する時に感じることもある。生徒自身の精神は、必ずしも教師や教科書が設けている枠組みとか取り上げられている文章が示すある種の完結形の中にだけ収まっているわけではない。生徒の心に自然に浮かぶ事柄が貴重な認識や発見を導くこともあるはずだ。初めからゴールが決められ、読み取れる（内容が理解できる）というプラスの方向に動くことが期待されており、読めたことを前提に何か感想や意見を言うことにもなっている。こうした一連の過程の中で、生徒自身がかれらの自然な疑問や思いも表現できるような場を作っていくべきではないかと思われる。この点で、Glove において読後の「Put It All Together」というセクションで、本文で「印象に残った語（句）」を取り上げて、それについて英語で書いたり話したりさせたりしている点に、小規模ながら生徒自身の心の動きに優しく沿う面が見られる。

第3の留意点として、多様な読みの方略を自ら発揮できるようになるという目標を忘れてはならない。実際に教科書の本文を読む過程はある種のブラックボックスであり、天満美智子氏（1990）が見たような文法訳読式のボトムアップの読みの過程に集中する教室もあるかもしれない。あるいは、川辺香織氏（2010）が見出したようなスラッシュ読みが中心になっている教室であるかもしれない。分析した教科書には、ディスコースマーカから読み解くことや、段落の構成を知ることや、スキミングやスキヤニングをするといった重要な方略が紹介されているものの、概してそれらを直接的に練習する箇所は少ないので、自力で多様な読みの方略を発揮できるような段階に至っているかどうかは疑問である。むしろ、本稿で分析した教科書は、文章の読みというものが大きな位置を占めているとは言

え、読みの技能や方略だけを育成しようとするものではない。それらを身につけるためには、天満美智子氏（1990）が提示しているような読みのストラテジーの練習問題に多く取り組みつつ、ある程度の長さの文章を読みこなす行動を続けていくことが必要ではないだろうか。

最後に、現実に外国語で文章を読む時には、自身が目的をもって文章を探し、見つけた文章の構成を理解しながら要点や詳細をつかんでいき、最終的に自分に役立てるわけである。そうした自主的な読みの活動も高校生の頃から経験した方が良い。ディベート大会に出るチームで資料集めをするといった高度に社会的な問題への関心から出るような調査活動だけではなく、読書の好きな生徒が自身の楽しみのために物語や絵本や推理小説を読むといった自然な読書活動も大切である。自身の必要と力量に応じて、英語で書かれたものに親しむ姿勢を身につけてほしいものである。

## 参考文献

- 大島幸 2020 Effectiveness of Explicit Instruction in Reading Strategies for Beginner-level Students. *The Center for English as Lingua Franca Journal 6* (pp. 55-64), Tamagawa University.
- 金谷憲（編著）1995 『英語リーディング論』英語教育研究リサーチ・デザイン・シリーズ3 河原社
- 川辺香織 2010 「高校生のクリティカル・リーディングの方略育成に関する研究」『熊本大学社会文化研究 8』（133-145 頁）
- 津村敏雄 2019 「改訂版『English Communication II』（高等学校外国語科用 文部科学省検定済教科書）の研究」『東洋学園大学紀要 27』（171-188 頁）
- 天満美智子 1990 『英文読解のストラテジー』大修館書店
- 仲本直美 2019 A Qualitative Study of the Process and Strategies of English Academic Reading at a Japanese Graduate School. 『教育実践学研究 24』（217-232 頁）
- Naiman, N. et al. 1996. *The Good Language Learner*. Multilingual Matters.
- 森明智 2020 「英語リーディングにおける自己省察を用いた読解方略の指導効果と読解力の関連」『中部地区英語教育学会紀要 49 (0)』（103-110 頁）